

第4章 「1年後残存有機物量」の活用法

○堆肥を利用するときの活用法

「1年後残存有機物量」を用いると、複数の堆肥の間で、土壤改良効果の程度を比較できます。

土壤改良効果については、牛ふん堆肥が高く、鶏ふん堆肥は低い、豚ふん堆肥はその中間といった漠然とした基準や、口コミ情報等に頼っているのが現状です。しかし、家畜ふん堆肥は、畜種の違いだけでなく、副資材や敷料の質や量、発酵方法や発酵期間、ときには餌の質といったもので、見た目や成分だけでなく、土壤改良効果も変化します。堆肥の成分分析値である、炭素率（C/N比）や炭素濃度（有機物濃度）などで、ある程度の判断はできます。しかし、有機物を多く含む堆肥であっても、土壤中で分解しやすい有機物が多い場合は、土壤中の有機物濃度を増やす効果が低いなど、判断を誤る場合があります。

「1年後残存有機物量」は、土壤中の有機物濃度を増やす効果に限ったものではありませんが、複数の堆肥の間で、土壤改良効果の程度違いを明確にします。

○堆肥を生産・販売するときの活用法

「1年後残存有機物量」は、土壤改良効果の程度を明確に示すことから、他の堆肥との差別化を可能にします。「1年後残存有機物量」の高い堆肥は、土壤改良効果の高い堆肥として、逆に低い堆肥は、肥料成分の供給効果の高い堆肥として、付加価値を付けて販売できます。

基本的に「1年後残存有機物量」は、難分解性の有機物、例えばオガクズなどを原料に多く混ぜることで上昇します。土壤改良効果の高さで付加価値を付け、販売代金の上乗せ分をオガクズ購入代金にまわすことで、家畜ふんに対するオガクズの混合割合を高めて発酵を容易にする、といった「1年後残存有機物量」の活用法が考えられます。

○環境を考慮するときの活用法

地球温暖化ガスの低減として、炭酸ガスを有機物として農地に固定することが考えられています。「1年後残存有機物量」は、堆肥の地球温暖化ガス低減効果の指標としても利用できます。